

2016年6月25日発行

地域と協同の

142号

研究センターNEWS

巻頭エッセイ

地域と協同の研究センターの面白さ

会員発で協同・組合の役割や可能性を考えませんか

向井忍（地域と協同の研究センター専務理事）



地域と協同の研究センターは1995年に発足し2000年にNPO法人になりました。研究センターは、堅い表現ですが、地域のくらしや仕事・まちづくり、人のつながりや協同（組合）の発展をめざして、会員参加型で学習・研修や情報交流、調査研究を行っている組織です。

事例を紹介します。地域と協同の研究センターは「小さなつながり」に着目していますが「小さなつながりを発見」したのは三河、三重、岐阜、尾張の地域懇談会に参加した会員です。それぞれでまちづくりの事例を調査しています。岐阜と三重は「小水力発電」がキーワード。三重の立梅用水では水域に植えたあじさいまつりが住民のつながりをつくり、岐阜の石徹白では小水力発電を運営する住民による農業協同組合が設立される。三河と尾張は「支え合い」がキーワード。豊橋では全中学校区にわたる「ちょいボラ」の発足、名古屋市の星崎では「おたがいさまシート」を通して一人の「困った」を地域ぐるみで支えている。地域懇談会から東海交流フォーラム実行委員会に集まり事例の意味を話し合い、いずれも「小さなつながりから、地域の未来が拓ける」ことに注目して今年1月の第12回東海交流フォーラムのテーマとなりました。

研究センターニュース編集委員会では、東海交流フォーラムを振り返る座談会を行いました。「小さなつながりを支える人のつながり、個人と協同組合をつなぐ力、協同組合の組織が地域と関われる単位、多様性を受け入れる地域の文化」と編集委員ごとの着眼点が語られました。（増刊「地域と協同」第五号でお読みいただき、感想や意見を寄せてください。）こうした会員の参加と気づきの循環が研究センターの事業の推進力です。会員は2015年度末で、正会員（個人235人・団体15）、賛助会員（個人108人・団体2）。多くの方の参画と新しい会員のご紹介もよろしくお願いします。

CONTENTS

巻頭：地域と協同の研究センターの面白さ - 会員発で協同・組合の役割や可能性を考えませんか	1
～第16回総会記念シンポジウム・内山節氏講演「くらしのつながりと地域の再生」～地域社会での協同組合の活動と役割を考える～	2
総会報告	5
研究フォーラム・地域懇談会「世話人募集」	7
情報クリップ	9
企画案内・書籍案内	12

研究センター 6月の活動

2日(木)	寄付講義⑦／研究フォーラム食と農
7日(火)	事務局会議／マイスター企画委員会
9日(木)	寄付講義⑧
16日(木)	寄付講義⑨
18日(土)	政策提言チーム
20日(月)	尾張地域懇談会世話人会
21日(火)	国際協同組合デー記念企画相談会
23日(木)	寄付講義⑩
24日(金)	協同の未来塾
27日(月)	研究センターNEWS発送
28日(火)	研究フォーラム地域福祉
29日(水)	三重地域懇談会世話人会／三河地域懇談会世話人会
30日(木)	寄付講義⑪／岐阜地域懇談会世話人会

第16回 総会記念シンポジウム 内山節氏 講演

「くらしのつながりと地域の再生」～地域社会での協同組合の活動と役割を考える～

ー成長だけではない 共創社会の時代ー

文責：伊藤小友美

5月28日（土）第16回総会記念シンポジウムを、約100名の参加で開催しました。講師は哲学者の内山節先生です。先生の近著「半市場経済」の内容をもとに、お話しいただきました。私たちが数年追求してきた地域でのつながりづくりの大切さにつながるお話で、多くの参加者の共感を呼びました。講演の一部を紹介します。

◆◇ 群馬県上野村 ◆◇

群馬県の上野村は、面積は群馬県でいちばん広いが、人口はいちばん少ない（約1500人）ところです。そこ東京を行き来するくらしをしています。

今、時代が変わったと思っているところです。過疎化しているという言い方もできますが、上野村は明治になって町村制ができてから、一度も合併していません。農協も森林組合も、合併していません。河川の漁協もあります。役場や協同組合が、役割分担しながら地域を守っています。

江戸期の人口は千人。去年の子どもの出生は10人くらいはあり、東京並の割合です。

去年、中学生に意識調査をしました。「将来どこで暮らしたいか」という問いに、100%の中学生が「上野村」と答えました。96%が森林です。昔は養蚕、和紙をやっていました。ふつうの林業をやっても採算が合いません。木を伐っている人が25人。目的は森林の維持です。良好な森をつくるのが目的で、伐採が目的ではありません。村ではおわん、お盆、大型家具等何でもつくりますが、伐採した木がその材料になります。ケヤキなどいいものが出ます。

20人くらいが森林組合で仕事をしています。伐ってきた木の5割、6割は利用できません。枝もある、曲がっている木もあるからです。

村の直営で、木質系のペレットにしています。村の中ではイノブタを飼っていますが、その敷き藁代わりに使い、村の畑に還元され循環しています。上野村には温泉が4カ所あり、ペレットは加熱用燃料にしています。ハウスで農業をしている人がいますが、そのハウス用の燃料にもしています。冬の暖房用の燃料にもします。そして、余ったペレットを使うようにして発電をしています。上野村では、地域エネルギー100%でいこうとしています。

◆◇ 小さいことはいいことだ ◆◇

こういうことをやって思うことは、「小さいことはいいことだ」ということです。名古屋市の電力を自給と思うとすごいですが、上野村だと1500人なので、工夫の仕様ががあるのです。このくらいの人口が、仕事ができる、そのための工夫ならやりようがあります。近代社会は、規模が大きいことがパワーがある時代ですが、工夫をし始めると、小さいことがいいということがわかります。5人が働ける場所を想像すると、名古屋、

東京ならコンビニ1軒ですが、村の場合、結構大きな雇用場所になります。村のいろんなものを壊さないようにつくっています。時代

が変わってきたのかという感じがしているこのごろです。

上野村は、私が行き始めた45年前は観光地ではありませんでしたが、ひそかな観光地になってきました。整備もしましたが、大規模開発的なことはしていません。村の雰囲気は観光資源です。去年あたりは、村の方でカウントしている観光客は21万人です。夏休みになると、宿泊が難しいくらいです。自然を見に来る人、昔からの雰囲気を見に来る人でいっぱいです。去年は違うタイプが増えました。森林を使って循環型の地域をつくる、最終的には地域エネルギーを目指す、上野村全体が社会的企業という位置づけです。地域社会自体が社会的企業。そういう感じでやっている、そういう村づくりをしようとしている村を見たいという観光客が猛烈に多くなりました。勝手に来て見て行くのはいいのですが、どうせなら説明を聞きたいと言って、役場、第3セクターに申し込むと対応をします。それが多すぎて、本来の業務ができません。今年から案内は有料になりました。地域づくりの方向性が観光資源になったというのはおもしろい。そういう地域づくりやっていると、どういう景色をつくっているか見たい人が増えました。社会の基盤のところでは、今、いろんな変化が起きていて、それが今の時代だと言えます。

「はん市場経済」と言うとき、アンチという「反」と半分の「半」、両方の意味があります。アンチ市場経済というと、別のシステムでいこうとなります。社会主義という方向性でかつては語られました。今の傾向は、市場経済を使いながら社会を動かしていこうという動きです。普通の市場経済ではなく、社会的使命を確立して、どういう働き方、どういう貢献をするかが大事です。持続的な半分市場経済が、いろんな形で広がりつつあります。

◆◇ 地域電力とソーシャルビジネス ◆◇

ソーシャルビジネス型をつくりたい、働きたいという人は圧倒的過半数を占めています。通常の企業は魅力が



ない。自分のお父さん、お母さん、おじいさんを見て、ああはなりたくないと思っている若い人が多いのです。社会とつながり、社会に役立てる働き方をしたいと思っています。

上野村で地域電力の話が出たとき、相当の高齢者が「やろう、やろう」と言いました。「昔、やっていたもん」と。早いところでは1950年代前半に電気が通りました。そのころ、ない地域もありましたが、中心集落は、地域の資産を持っている人たちが共同出資をして水力発電の会社をつくりました。その跡が残っています。電力会社の始まりはそこにあります。明治になって、日本の農村地帯は結構、水不足の社会でした。目の前に川があっても利用できないのです。生活用水くらいなら、天秤桶をかついでも可能だが、農業用水は無理です。かなり上流から用水路を引っ張りました。毎年改修をし、漏れる場所をかためました。そんなことをしながら、取水した水が円滑に田んぼにくるように直したのです。

揚水ポンプを利用して川の水を汲み上げることを明治になって考えました。各地で発電会社ができたのが、今の電力会社の始まりです。地域社会のためになればよいと考えてつくったのです。発電が始まると、余る電気もあります。電灯線という形で使うこともできました。地域電力ができると、電気は安定した方がいいので、規模の大きな電力に変えて安定性をはかるようになり、広域的な地域電力ができました。電力会社はソーシャルビジネスで発生しました。「みなさんのために」というお金持ちができました。

電力会社もソーシャルビジネスで始まったのに、第二次大戦が始まる時に、日本電力に一本化されました。国策です。戦後、10電力体制になりました。今の電力会社にソーシャルビジネス的なことは見えませんが、もともとはそこから出発しています。日本の企業はそういうところが多いのに、いつのまにかただの金儲け企業になりました。

協同組合は、志のソーシャルビジネスです。でも規模が大きくなって、大規模を動かそうとすると営利企業とかわらない協同組合も発生します。ドイツにも協同組合はたくさんあります。規模を大きくして、ただの企業のような協同組合になり、失敗も起きています。

◆◆ 村＝社会的企業 ◆◆

そのとき、何を考えるべきでしょうか。

日本だけでなく、世界中そうですが、人間は共同体社会でくらししてきました。社会をどうつくるか、経済をどうつくるか、地域の文化をどうつくるか、地域の信仰のありよう、そういういろんな生きる世界をつくるさまざまな要素はつながって展開しています。ひとつひとつ独立してはいません。社会のありかたを考えながら企業活動をするのが大切です。社会と企業の再統一とも言えます。

上野村では、村の経済、社会が分離できないので、「上野村は社会的企業だ」という見解が出ます。村人の生活

そのものでもあります。

◆◆ 山の神信仰 ◆◆

上野村は山奥なので、山の神信仰、水の神信仰があり、石仏も千体あります。生活の中にも神様、仏様がいて、それが地域文化でもあります。すべての要素がつながりあっている社会が残っているのです。

最近、私は信仰にこだわっています。今、宗教・信仰という言葉を経く使っていますが、この言葉は明治以前には存在しませんでした。外国語を翻訳するのにつくった言葉です。仏教の言葉に「宗教・信仰」があったのが、探したらやっと見つかって、これが合うということで翻訳したものです。誰も知らない言葉が、突然出てきました。明治以前は、宗教も信仰もありませんでした。

神様はいるし、仏教はあるし、明治以降の人間が宗教・信仰と呼んでいるのは違うものです。教義があり、組織があり、一つの宗教体、信仰体を呼びます。上野村だと、山の神信仰は今でも強く、100カ所くらい祀っています。起源がわかりませんが、縄文時代からあったと推測する研究者もいます。言語がなかったからわからないが、あったかもしれません。記録上見ただけでも1500年続いています。これがなんで続くか、よくわかりません。村に住んでいると、山の神は大事にしたいと思い、挨拶をします。特に木を切るときには、ていねいに、挨拶をします。木は伐ったが、森は再生すると約束をします。

森とのつながりが山の神とのつながりです。山を歩くと、でっかい木が残っていることがあります。この辺は伐らなかつたなとわかります。一本のトチの木は、枝が伸びておりそれで下を冷やすから、一本だけで広大な領地を獲得しています。一本の木で300坪獲得している木がたまにあります。なんで残ったか、村の人間はすぐわかります。山の神が休憩する木です。林業関係者は絶対、伐りません。命令されても伐りません。

◆◆ 経済の暴走と互酬性の経済 ◆◆

近代社会では、経済は経済、社会は社会、文化は文化、ばらばらになりました。そして経済が特殊に力を持ち、経済の暴走を産みました。他の要素が壊されることが起きました。

今の時代、結構大事な経済学者として、カール・ポランニーがいます。日本ではほとんど知られていませんでした。1960年代終わりに、玉野井芳郎（たまのいよしろ）さんが紹介し、訳しました。経済社会学者の創始者です。玉野井さんが考えていたのは、生命循環経済です。経済が生命のつながりになる。生命循環の経済をつくり得る。生命系の経済学、地域主義を掲げてやろうとしました。カール・ポランニーの考え方は、すべてがつながりあって一体化しているというものです。経済だけが独立しているわけではない。そこにらしもあるのです。

縄文時代、黒曜石が産出するのは北海道を入れて4カ所ですが、それが日本中に渡り、ヤジリ、ナイフ等が出

ています。何らかの交換する方法があったのは確かです。東大寺の文書には、東大寺を造営する（奈良時代）とき、人を大量に雇って、人海戦術でやったことが書いてありました。材木を運ぶだけでも大量です。地域にも何かを払ったと書いてあります。米か、金かわかりませんが。人を労働力として雇う仕組みもありました。しかし、それが主流ではありません。

主流のシステムは、ポランニーは互酬性経済と言っています。あげたり、もらったりです。上野村では、「あれ、お願い」と言い合っています。お礼の仕方はいろいろあって、それ以上やってはいけません。一升瓶を一本持って行く場合があります。すぐに持って行くのは失礼で、年末に持って行くのが正しいケースもあります。一升瓶ではなくて、自分のうちでとれたものをお礼に持って行く場合もあります。漬け物がうまく漬かったから持って行く、それが正しいケースもあります。ある種のことはお金という決まりがあります。それは特殊技術を使わせてもらうことです。自分では伐れない木を伐ってもらうとき、「あいつならできる」と教えてもらい、その人に頼みます。このケースはお礼としてお金を払います。決まっている価格だけ、それもかなり安いものです。

互酬性の経済は、あげたりもらったりの経済ですが、決して等価交換ではありません。共同体を持続させるのにうまいルールです。これじゃ金額が低すぎるから上乘せする、というのはやってはいけません。頼みにくい人が出てくるからいけないのです。互酬制が基盤だと、市場経済も制約されて主流になりません。

◆◇ 経済を私たちの社会の中に埋め戻す ◆◇

近代、市場経済が勝手に暴走するようになりました。社会の中に経済を埋め戻すのがポランニーの課題です。同じような発想をしたのが、シルビオ・ゲゼルです。ゲゼルが着目することが2つあります。

1つめは、経済が暴走する原因に、土地の私有性があることです。自然がつくってくれている地代は、自然に払わないといけません。土地はすべて国有化すべきで、使いたい人たちが入札をして、いちばん高い入札した人が使うことにしたらどうかということです。2～3年混乱するかもしれないが、自然に落ち着くところに落ち着く。地代はかなり安くなると読んでいました。国には、固定資産税が集まります。自然から借りているので、それを次世代、未来のために使います。具体的には女性と子どもに使います。女性の地位が低いのは、経済的基盤が弱いというのがその理由・根拠です。女性年金みたいな形で女性に配り、そのことで女性の地位を向上させます。それと、子どもたちの成長のために全部使います。自然の地代を国が一時預かりをして、未来のために使うのがゲゼルの発想です。おもしろいですね。日本の固定資産税は、何に使われているのかと思います。

2つめには、経済が暴走する理由は、すべての商品は、時間とともに劣化するということです。千円で売っている野菜は、1週間たったらタダ以下。ゴミ処理しないと

いけなくなります。洋服もそう。書画骨董は時間とともに高くなる例外もあるが、早かれ遅かれ時間とともに経済価値は劣化します。もっとも純粋な商品は貨幣です。コンビニへ行き、ペットボトルを買ってお金を払います。きゅうりを持って行って、交換しても構わないというのは、村の店なら可能かもしれない。ペットボトルの水は、必要な人は欲しいが、全員欲しいわけではありません。普遍性が低い。お金は普遍的な商品。もっとも純粋な商品。何とでも換えることができる商品です。道具として使って、スムーズな交換をしています。すべての商品は時間とともに劣化するのに、もっとも純粋な商品は劣化しない。道具であるはずの貨幣の方が力を持っています。時間とともに増殖もします。ある程度あれば、銀行に預けると増えます。今の日本だと、1千万円貯金があると、100円くらいかな。税金も2割くらいとられます。それでも増えています。お金は増殖する性格を持つ商品です。片方は劣化する。このアンバランスが、貨幣に独特の権力を与えました。貨幣も劣化すればいいというのがゲゼルの考え方です。劣化するお金の発行です。発表したときは、笑い物になりました。でも一部から熱烈な支持があったのです。金融恐慌の折り、オーストリアのある地域が劣化する貨幣を発行しました。地域通貨です。早く使わないと劣化するから、みんなが使いました。それを見ていて、世界中で3千くらい、そういう通貨が発行されました。

フランスの有名な文化人類学者レヴィ＝ストロースは、近代以前の社会はすべてが一体になっていたが、結局それをバラバラにしてしまったのが近代で、私たちはその近代がもたらしてしまった結果に困っていると言っています。彼は、フランス革命は偉大な革命として歴史に刻まれているが、フランス革命こそが世界を壊し始めた出発点であるというふうにも言っています。この辺で共通するのは、どういうふうに経済をわたしたちの関係の世界の中に埋め戻すかということです。

それを原理主義的に追求してしまうと、自給自足だったり、きわめて少人数のコロニーの形成だったりして、逆に社会性を失っていきます。目標を設定して市場経済の中でくらすことが大事です。イギリスではエシカルビジネスということばが使われていたりします。日本語にするのなら、「共に生きる経済」とすればいいと思います。世界ではいろんな実験が始まっています。

「大きいことはいいことだ」、大きなシステム、大きな企業、大きいことが力を持って主導的な役割を果たしてきました。それが今、歴史的な転換期に来ています。上野村は小さいから有利な時代です。結び合いの中でのソーシャルビジネス、その方が基盤が強いというケースも出てきています。昔は志で石にかじりついてがんばってきたところがありました。そちらの方が信頼できるし、そちらの方が経営的にも安定基盤をつくっているということが発生しています。

時代の転換の中での半市場経済と考えています。

ご静聴ありがとうございました。

2016年度地域と協同の研究センター通常総会をひらきました

「地域を基盤とした研究センター活動を探求して！」



西川幸城代表理事

2016年5月28日（土）に、生協生活文化会館4階ホールにて、2016年度通常総会（第16回）を開催しました。総会への参加会員は166名（実出席79名、書面87名）、出席率66.9%でした。

西川幸城代表理事のあいさつにつづいて、第1号議案2015年度事業報告と決算承認の件、第2号議案2016年度事業計画と予算決定の件、第4号議案定款の一部変更の件について、向井専務理事から提案され、8名の会員から発言がありました。向井専務理事からまとめがあり、第1号議案・第2号議案は賛成多数で提案通り採択され、第4号議案の定款の一部変更は2/3以上の多数による賛成で採択されました。第3号議案理事

・監事の選出及び顧問委嘱承認の件について、任期満了に伴う理事・監事の選出は、理事会からの推薦で35名の理事の立候補と2名の監事の立候補があり、投票の結果、全員が過半数の信任をもって選出されました。また、顧問委嘱について、拍手をもって承認されました。

各会員の発言から（文責：事務局）

犬飼会員：年金について、65歳以上の方はもらっているが非常に少ない。少ないにもかかわらず、毎年0.9%ずつ下げていく。憲法違反ではないかと裁判をやっている。研究センターの中で、年金について今後どう考えていくか。

佐藤会員：昨年の9月から研究センターの環境フォーラムにいらしていただいて、貴重な経験をさせてもらったと感謝している。町内会、自治会が、NPO、協同組合と連携することが課題になっているが、そういう実践が名古屋や三河、八百津で始まっている。その意味を受け止め、その一員であることに誇りをもたないといけないと思う。

エネルギーの地産地消は、政策として考えていかないといけないテーマではないか。

福井会員：「岐阜を知ろう・つながろう」の冊子ができました。14年度、15年度の岐阜地域懇談会の活動をのせています。岐阜でプチフォーラムを、今年も、7月に予定しています。岐阜の中山間地域でも、高齢化がすすむエリアは多いが、がんばっている人たちがたくさんいます。そんなみなさんから報告いただきます。

原会員：2回、石徹白（いとしろ）の小水力発電を見に行き、フォーラムにその中心になってみえる平野さんをお呼びしました。2007年から平野さんは石徹白に入っているが、古くからある風習もいろいろある中で、どのようにして、農業協同組合をつくり、出資してもらって、県の補助も得て、石徹白地域の年間の電力をまかなうことができる規模の水力発電所をつくることのできるようになったのか。どのようにして地域に入り込んでいるのか。もっと聞きたい。

岡本会員：石徹白の水量発電は、農業協



2016年度通常総会（第16回）

同組合の方式で設立されている。素晴らしいことだと思う。地域に根ざす、日本協同組合学会は「民主主義の原則を否定するTPP交渉参加に反対する」声明を発表した。起草委員会では学習会を2回やり、この文章をまとめた。前回は秘密交渉の懸念だったが、今回はふみこんで、批准に反対としている。国会議員、マスコミにもお願いする。まわりの方に広めていただきたい。よろしくお願いします。

前澤会員：2号議案に、持続可能なまちづくりと協同組合の役割を考えるというテーマがあり、うれしく思う。新城市では自治基本条例をつくり、その条例が実施される時、地域自治区もつくった。今年3年過ぎ、3年経って、女性の会長さんが生まれた。コープあいちの新城地域委員の一人。自治基本条例も、コープあいちの組合員が大勢関わりました。私自身は地域と協同の研究センターで学んで、地域に帰り、それがこういう形になっていると思う。それを見て行政の職員も刺激を受けている。

高井会員：みえ地域懇談会では水土里ネットの立梅用水の見学、再生可能エネルギーの勉強をしてきた。素晴らしい活動を見せてもらった。5月も見学に行き、電気自動車を小水力発電で蓄電し、地域のパトロールに活用されていました。松阪のエリア会でお話を聞いて、つながりをつくっていききたいと相談している。

大宮会員：2年くらい前に環境の世話人会にいらしてもらって、設楽ダム、六条潟、石徹白といろいろ参加した。いい話が聞けてよかった。「未来を拓く協同の社会システム」という本が出た時に、生協らしい生協をめざすんだなと確認できて、感銘を受けた。研究センターで講習会、学習会のような深読みできる企画をもっていただけるとありがたい。「協同の未来塾」に興味がある。一般の組合員でも参加できるものと考えていただきたい。

向井専務理事のまとめ

実践に裏付けられた提案をいただき、感銘しております。

犬飼さんの年金の問題は、個人的な保障にゆだねるという発想が今の国の考え方を象徴しています。研究センターで取り組む政策提言の活動の中で反映できないかと考えております。ぜひ学ぶ場をご一緒につくっていききたいと思っております。

佐藤さんのエネルギーについてのご意見は、共に考えるということは研究センターとして可能だと思います。全国の生協ではいろいろな取り組みがあると思っておりますので、情報を集め考えていければと思います。

福井さん、原さんからいただいた岐阜の地域懇談会の取り組みは、関わっている方から学び、地域の課題も含め考えていけるようにしたいと思っております。

岡本さんからTPPに関する日本協同組合学会の声明について発言いただきました。声明の内容は、研究者の皆様が、一つ一つ内容を分析され、その結果を持ち寄って声明としてまとめられたものです。今のすすみ方で、国の向かう方向が決まってしまうということは問題と思っております。協同組合でもぜひ考えていければと思います。

前澤さんの発言で、生協での経験が地域の中で生かされているということでした。そういうことを大事にし応援できる活動に取り組むことができればと思います。

高井さんから、小水力発電、地域福祉に関わって発言いただきました。コープみえの高井さんが地域懇談会の事務局を担っていることが大きな力だと思います。地域の事務局をどうするかは大きな課題です。参考になる発言をいただきました。

大宮さんからは、研究フォーラム環境の学びに加えて、「未来を拓く協同の社会システム」について評価をいただき、ありがとうございます。生協の（未来の）あり方研究会でも学ぶ場を考えたいと思っております。組合員自身の学びの場をどうするか、これは理事会でも検討したいと思っております。

地域と協同の研究センターはみんなで作っていく場です。今後も、活動の中で発言いただいたことをみんなで考え合っていきたいと思っております。



2016年度通常総会（第16回）

4つの研究フォーラム 2016年度 世話人 大募集！



地域と協同の研究センターでは、2007年度より4つの領域で、年間を通じ情報交流しながら、調査研究活動をすすめるパネルという場を設けてきました。この9年間の活動は、多くの出会いや財産を生んでいます。

今年度から名称を「研究フォーラム」に統一します。それぞれの領域別の場は世話人会を持って、日常の情報交流や公開企画の準備等を行っています。2016年度の世話人を、会員及び団体会員の構成メンバーのみなさんから募集します。

一緒に、楽しくらしに役立つ活動を考えてくださる方、大募集！

「食と農」

継続できる農業のあり方を「松阪農業公園ベルファーム見学・学習（9月2日）」「公開学習会：食と農を考える学習会 - 日本農業は持続可能か（2月26日）」を通して考え合いました。

2016年度は公開学習会で提起された、「生活者、消費者の農業への関わり方」「市民、地域が支える農業」について実践例の調査・研究をすすめます。

＜次の世話人会＞

日時：8月2日（火）10：00～

会場：ワークライフプラザれある 会議室3

「環境」

「浜岡原子力発電所」の見学から、「再生エネルギーの学びと今後のエネルギーを考え合う場」として公開学習会を開催してきました。

2016年度は各地域の環境活動を応援するための情報収集・発信。再生エネルギーに焦点を当てた情報収集（見学・学習）・発信に取り組みます。

＜次の世話人会＞

日時：7月27日（水）13：30～16：00

会場：ワークライフプラザれある 会議室1

「職員の仕事を考える」

組合員から見た職員像のヒアリングから 2015年度は支所・センターの中間管理者（ぎふ・みえ・あいちから2名ずつ）から仕事の実態をヒヤリング。組合員・地域との接点にある現状とやりがいが見えてきました。

2016年度はこれまで生協を支援して下さった有識者の皆さんから「期待したい職員像」をお聞きし、仕事を研究します。

＜次の世話人会＞

日時：7月15日（金）10:00～12:00

会場：ワークライフプラザれある 会議室3

「地域福祉を支える市民協同」

継続して取材・調査を行ってきた「窯のひろば」とNPO「M to M」の活動について、そこから何を読み解くのか、研究フォーラムの課題として話し合いをすすめてきました。その成果を報告集としてまとめる予定です。

これらをふまえながら、さらに「これからの地域福祉と非営利・協同組合の役割」について、その課題を深めていきます。

＜次の世話人会＞

日時：6月28日（火）13：30～16：00

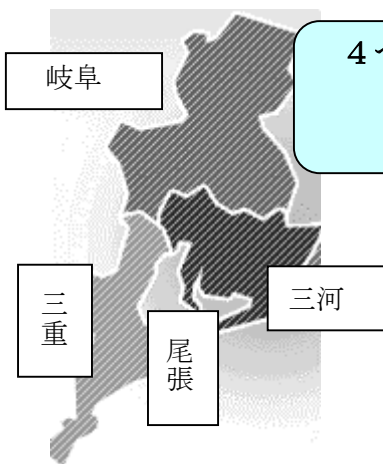
会場：生協生活文化会館3階応接室

お申し込み、お問い合わせは、地域と協同の研究センターまで。（担当：大島、渡辺）

TEL 052-781-8280

FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com



4つの地域懇談会（三重・岐阜・尾張・三河）
世話人 募集！
 楽しいこと
 一緒に！

地域懇談会は、地域を軸とした研究センター活動として、4つの地域（三重、岐阜、尾張・三河）で会員がそれぞれ関心ある情報を持ち寄り、交流し、学び合い、研究活動をすすめる場です。それぞれの地域で、交流や学習、見学などの企画を考えすすめていく世話人を募集します。

三重地域懇談会

2015年度は、再生可能エネルギーをテーマに、三重での取り組みについて学びました（水土里ネット立梅用水型小水力発電の調査、木質バイオマス発電所と熱利用の施設の見学）。

2016年度は、「障がい者福祉」「地域福祉」「郷土料理・食文化」をテーマに、学習や地域の調査に取り組みます。

世話人会日時：6月29日（水）

岐阜地域懇談会

2015年度は、第11回東海交流フォーラムの内容をコープぎふの組合員・職員に聞いてもらおうと、コープぎふ本部で「ミニフォーラムINぎふ」を開催しました。「岐阜を知ろう！つながろう！」をテーマに明宝小川地区、石徹白、東白川等を訪問し、見学交流を行いました。

2016年度は、引き続き岐阜地域の調査・研究活動を行います。

世話人会日時：6月30日（木）

尾張地域懇談会

2015年度は、尾張の実践事例を学ぼうと、南医療生協の「よってって横丁」「星崎診療所」を見学し、福祉事業のお話をお聞きしました。

今後のテーマを「『都市』における『地域』を考える」とします。無料学習支援教室、若者の自主学習の場、憩いの場等の訪問・見学を通して、地域を考えます。

世話人会日時：8月29日（月）

三河地域懇談会

2015年度は、「私たちの暮らしと介護」～地域で粋な老い支度を～をテーマに、南医療生協「よってって横丁」の見学や、福祉の学習会（介護保険の制度と実際、社会保障制度と税の一体改革等）、六条瀧の見学と交流会、「豊川の自然と設楽ダム」環境学習会、豊川をさかのぼるフィールドワーク等に取り組みました。

3か年計画の3年目にあたる2016年度は、地域での実践に学び、福祉の現場での声を聴き、テーマをさらに掘り下げます。また、会員交流の場を設けます。

世話人会日時：6月29日（水）

お申し込み、お問い合わせは、地域と協同の研究センターまで。

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315 E-mail AEL03416@nifty.com

（担当：大島、渡辺）

情報クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価/冊数
<p>▶チームワークを発揮して共有した目標を達成する</p> <hr/> <p>NAVI 2016.6 771</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 チームワークを発揮して共有した目標を達成する</p> <p><コープのある風景> コープおきなわ <こんにちは！生協男子ですっ！> 東都生協 小暮雅一さん <元気な店舗の取り組みを学ぶ> コープふくしま コープマートあだたら <宅配・現場レポート> 第一回全国生協現場レポート <生協大好きママコプ山さんの 教えて！CO・OP商品> CO・OPミックスキャロット <☆突撃☆あなたの町の組合員活動> パルシステム千葉 <つながろうCO・OPアクション情報> コープみえ <想いをかたちにコープ商品> CO・OP九州のカットほうれん草 <エッセイ> 東京⇄パース 小島慶子の8000キロ通信 空からひとりごと <日本全国ふだんのくらしを支えたい> コープみらい <明日のくらしささえあうCO・OP共済> コープこいがた <この人に聴きたい> 極地生態学者 田邊 優貴子さん <ほっとNAVI> 生協協立社 エフコープ</p>	<p>2016年 6月 A4版 35頁 定価 350～円</p>
<p>▶格差・貧困問題が拡大するなかで協同組合は何ができるか</p> <hr/> <p>にじ 2016 夏号 第654号</p> <p>社団法人JC総研</p>	<p>[オピニオン] 勝又博三氏（当研究所 常務理事）</p> <p>[特集] 格差・貧困問題が拡大する中で協同組合は何ができるのか</p> <p>特集総題 津田直則（桃山学院大学 名誉教授） 論考編</p> <p>21世紀の新中世主義「よりゆっくり、より近く、より寛容に」 水野和夫（日本大学 教授） 協同組合というプロジェクト 津田直則（桃山学院大学 名誉教授） 新たにスタートした生活困窮者自立支援制度の概要と課題 大西 連（認定NPO法人自立サポートセンター・もやい 理事長） 生協における生活相談・貸付事業の現状と課題 上田 正（日本生活協同組合連合会 専務理事・協同組合研究家）</p> <p>(実践編)</p> <p>「森」が鍵の地方再生と生活困窮者支援 伊藤 剛（ワーカーズコープセンター事業団西日本本部 事務局長） 協同組合コミュニティの可能性について ー生活クラブ生協関連グループの地域における取組みー 藤木千草 (ワーカーズコレクティブ及び非営利・協同支援センター ー一般社団法人ワーカーズコレクティブぷろぼの工房)</p> <p>韓国における協同組合コミュニティの形成 ー「原州協同社会経済ネットワーク」を中心にー 金 起燮 (トウレ生活協同組合連合会(元)専務理事・協同組合研究家)</p> <p>モンドラゴンとケバックにみる協同組合とコミュニティとの協働の形成 石塚秀雄（非営利協同いのちとくらし研究所 研究員）</p> <p>働きづらさを持つ人への就労支援の取組みについて 本多 敬（大阪いずみ市民生協 常務理事・福祉事業本部長）</p> <p>町ぐるみの「農福連携」ー「プロジェクトめむろ」の取組み 濱田健司（JA総合研究所 主任研究員）</p>	<p>2016年 夏号 B5版 183頁 定価1600円</p>

	<p>[連載Ⅰ] 原発災害下での暮らしと仕事 —生活・生業の取り戻しの課題（第7回） 風評被害の構造と5年目の対策 関谷直也（東京大学総合防災情報研究センター 特任准教授） 福島県が抱える風評問題と地産地消を取り戻す意義 —流通からのアプローチ— 則藤孝志（福島大学 特任准教授）</p> <p>[連載Ⅱ] 地域発再生可能エネルギーの取り組み（第3回） 北海道における「一村一エネ」事業の展開 —再生可能エネルギーの導入で地方創生を後押し— 天内 孝（北海道経済部産業振興局環境・エネルギー室 主査）</p> <p>[連載Ⅲ] 協同組合における職員の地位と役割 —「職員論」 試論— 堀越芳昭（山梨学院大学 元教授）</p> <p>[書評] 野中郁二郎・勝見明著『全員経営』（日本経済新聞出版社） 石田正昭（龍谷大学教授） 佐藤滋・古市将人 著 『租税抵抗の経済学～信頼と合意に基づく社会へ』（岩波書店） 田中夏子（社会学(地域社会学、労働社会学、協同組合論)・農) 濱田武志・小山良太・早尻正宏著 『福島に農林漁業を取り戻す』（みすず書房） 白石正彦（東京農業大学 名誉教授） 木下斉 著『稼ぐまちが地方を変える』（NHK出版新書） 矢部拓也（徳島大学 准教授）</p> <p>[各種協同組合の窓] 「浜の活力再生プラン」の取り組みについて 兼村貴裕（全漁連信用・組織指導部）</p>	
<p>▶これからの都市農業 ～人・まち・農の コミュニティづくり</p> <hr/> <p>月刊 J A</p> <p>2016. 6 736</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>特集 これからの都市農業 ～人・まち・農のコミュニティづくり 都市農業振興基本計画の概要と期待されるJAの役割 農林水産省 農村振興局</p> <p>地域と共に農業を守る — JAの取り組みに学ぶ ① JA大阪みなみ ② JAぎふ</p> <p>都市農業振興基本法制下における都市JAの役割 —地方の中核都市をモデルにした検討 星勉（地域社会計画研究所代表・JC総研客員研究員）</p> <p>オピニオンリーダーに聞く 宇都宮洋才 ・きずな春秋 —協同のこころ— 山に植える協同心（後編） —絶えない早川スピリット— 童門冬二</p> <p>・協同組合の広場 日本生協連 JF全漁連 全森連 全国大学生協連</p> <p>JAトップインタビュー 美田と優秀な農家を守る 阿部茂昭（山形県 JA 庄内みどり 代表理事組合長）</p> <p>・展望 JAの進むべき道 リスクとの付き合い方 太田実（JA 全中常務理事）</p> <p>・海外だより 連載 61 [D.C 通信] アメリカにおける国(連邦)と州の関係 中村岳史</p> <p>トピック 「がんばろう！日本の畜産・酪農」応援キャンペーンに多数の応募！ JA 全中農業対策部畜産園芸対策課</p>	<p>2016年 6月 A4版 50頁 年間購読料 4,800円 (送料別)</p>
<p>▶現代日本の税制度と税 の持つ意味を考える</p> <hr/>	<p>■巻頭言 コーポレート・ガバナンス管見 山辺俊文</p> <p>▶特集 現代日本の税制度と税の持つ意味を考える</p> <p>租税の役割と原則 池上岳彦</p> <p>歴史的に見た日本の税制構造 —なぜ不公平な税体系になってしまったのか— 野村容康</p> <p>地方税・財政の課題 林宏昭</p> <p>民間税制調査会による税制改革提言のポイント 青木 丈</p> <p>租税への合意と財政に対する信頼 —日本における租税への忌避感の背景について— 古市将人</p>	<p>2016年 6月 80頁 B5版</p>

<p>生活協同組合研究</p> <p>2016. 6 485</p> <p>(財) 生協総合研究所</p>	<p>コラム1 「社会連帯」の基礎となる税制を市民の力で コラム2 税を通じた社会統合の戦略 ーカナダを事例として</p> <p>山根香織 山崎由希子</p> <p>■時々再録 どうみるマイナス金利 ー経済史・金融史からみたQOE(量的・質的金融緩和)ー 白水忠隆 佐々木達也・藤井克裕</p> <p>■本誌特集を読んで (2016・4) ■新刊紹介 女性と子どもの貧困問題に関する4冊 近本聡子・松田千恵</p>	
<p>▶TPPの拙速な議論は 日本のためにならない</p> <p>~~~~~</p> <p>文化連情報</p> <p>2016. 6 459</p> <p>日本文化厚生農業協同組合 連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー (28) 「地域と暮らし」をテーマに TPPと医薬品特許～その競争制限的な本質 第20回臨時総会を開催し全議案を可決 院長リレーインタビュー (289) 江南厚生DNAを次の代へ伝えていきたい 二木学長の医療時評 (138) 2016年度診療報酬改定の狙いとその実現可能性・妥当性を考える</p> <p>メディカル・エコタウン 土浦協同病院 高度先進医療から包括的地域医療の拠点 TPPの拙速な議論は日本のためにならない</p> <p>臨床倫理メディエーション (2) 「高齢化とがん」から見えてくる臨床倫理問題 農村医学は世直し運動！ 私の歩んできた道(15) いよいよ医療の本陣へ 医食農同源 医療の現場を食から支える (5) 未病を治す取り組み・・・病院薬膳ランチ 病院建築と環境 (11) 病院環境の管理基準 地域産業との連携による再生エネルギーの新展開 (10) 復興に向けた再生エネルギーの活用と福島発電の取り組み 非営利協同事業としての共済事業は存続できるのか ー農協共済を中心に 岡田玲一郎の間歇言 (136) DPCの変化と日本版ACOについて (Ⅱ) デンマーク&世界の地域居住 (85) オランダの革新⑥ 大規模組織と24時間訪問介護看護 熱帯の自然誌 (3) ボルネオ島の地質と地史 『三国志』魏志倭人伝が描く倭国の実相 (下) 倭国の本流は「九州王朝」だった！！ ●野の風● 定年退職も楽じゃない ■書籍紹介 『地域農業の持続システム ー48の事例に探る世代継承性』 『国家戦略特区の招待 外資に売られる日本』 □自著を語る 『日本の再生可能エネルギー政策の経済分析 ー 福島の復興に向けて』 大平佳男 『イリオモテヤマネコ 狩の行動学』 安間繁樹</p> <p>線路は続く (99) おかえりなさい 名松線 西出健史 最近見た映画 緑はよみがえる 菅原育子</p>	<p>2016年 6月 B5版 88頁</p> <p>文化連情報 編集部 03-3370 -2529 *注</p>

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✳)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

岐阜県博物館開館40周年記念講演会

スプーン一杯の土が人類を救う～微生物の力を借りて薬を創る～

日時：2016年8月7日(日) 13:30～15:00

場所：岐阜県図書館多目的ホール 岐阜市宇佐4-2-1

岐阜県博物館では、飛騨美濃合併140周年並びに開館40周年を記念した講演会をシリーズで開催します。今回は北里大学北里生命科学研究so 塩見和郎(しおみ かずろう)教授をお招きして、2015年ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智(おおむらさとし)博士の受賞理由となった抗生物質の一種であるエバームクチン発見の歴史やその作用について解説をいただくとともに、現在新たに取り組んでいる様々な病気を対象とした抗生物質の探索研究についてご講演いただきます。

講師 塩見 和郎 (しおみ かずろう)

北里大学大学院感染制御科学北里生命科学研究so

微生物応用科学研究so 教授

- ・1954年生まれ・東京大学農学部農芸化学科卒業 農学博士・寶酒造株式会社 中央研究所・研究員
- ・(財)微生物化学研究会微生物化学研究所・客員研究員を経て北里研究所に勤務。2005年より現職・
- ・微生物の生産する抗生物質・生物活性物質の探索研究に携わる。

主催：岐阜県博物館・岐阜県図書館

定員：300名 参加料(無料)

申込：岐阜県博物館ホームページの申し込みフォーム又は電話(0575-28-3111)、岐阜県図書館の窓口へ

書籍案内



断社会・日本 —なぜ私たちは引き裂かれるのか—
 体裁=A5判・並製・80頁 定価(本体620円+税)
 発行日：2016年6月3日 出版社：岩波書店

日本社会が壊れつつある。労働・財政・所得などの経済指標、自由・人権・信頼といった社会指標、どこを見ても断線が刻み込まれている。なぜこんなことになっているのか。断線を越える突破口は、どこにあるのか

- 目次
- 断社会の原風景——「獣の世」としての日本 松沢裕作・井手英策
- II 断線の諸相
- 1 働く人びとの断線を乗り越えるために 禿あや美
 - 2 住宅がもたらす断線をこえて 祐成保志
 - 3 日本政治に刻まれた断線 吉田 徹
 - 4 西欧における現代の断線の状況
- 右翼ポピュリスト政党の台頭を通じて 古賀光生
- 5 固定化され、想像力を失った日本社会 津田大介
- III 想像力を取り戻すための再定義を 井手英策・松沢裕
- 岩波書店ホームページより

2016年6月25日発行(毎月25日発行)
 定価200円
 (税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
 発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
 代表理事 西川 幸 城
 〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39
 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
 E-mail AEL03416@nifty.com
 HP http://www.tiiki-kyodo.net/

- #### 研究センター 7月の活動予定
- 1日(金) 常任理事会 5日(火) 事務局会議
 - 6日(水) 国際協同組合デー記念企画
 - 7日(木) 寄付講義⑫ 9日(土) マイスターコース(開講)
 - 13日(水) 暮らしを語りあう会 14日(木) 寄付講義⑬
 - 15日(金) 研究フォーラム職員/生協の(未来の)あり方研究会
 - 16日(土) 理事会・政策提言チーム
 - 21日(木) 寄付講義⑭ 22日(金) 協同の未来塾
 - 23日(土) 岐阜地域懇談会「ミニフォーラム in 岐阜」
 - 25日(月) NEWS編集委員会
 - 26日(火) 研究センターニュース発送
 - 27日(水) 研究フォーラム環境 28日(木) 寄付講義(最終)
 - 30日(土) マイスターコース②